

## 西武線と私

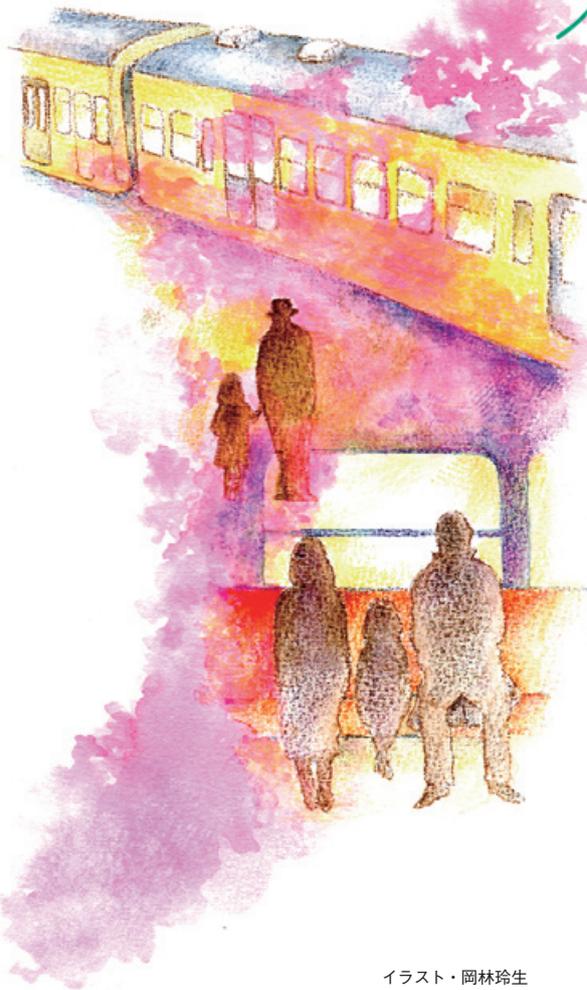
電車と言うと、私には忘れられない光景があります。私が五歳頃の出来事です。冬の初めの柔らかな日差しが電車の窓いっぱいになり、その眩しさを目を細める私がいま。その隣には父と女の人が座っていました。しばらく父の肩越しに、その女の人を見ては、目が合うと父の後ろに隠れる。そんなことを繰り返しながら、電車はいくつかの駅を通過して行きました。そのうち、その人が私にニコツと頬笑み、それを見て私は仏頂面のまま、二人の間に割って入り、座ったのでした。

私の父は時代小説家の藤沢周平と言います。その時の女の人が、父が再婚した今の母です。それまで父と祖母の三人暮らしでしたが、母が来たことにより、我が家の生活は明るいものになりました。仏頂面で、あまりおしゃべりが上手ではなかった私も母を相手に、おしゃべりな女の子に育ちました。

幼い頃を清瀬で過ごし、その後小学生になって東久留米へ引っ越しました。東久留米は緑がとて多く、家の前に大きな林があり、父は飛んでくる野鳥を見ては楽しんでいました。駅に向かう途中には河原が続いていました。散歩の好きだった父にくっついて行き、父が小説の案を考えている間、シロツメクサで首飾りを作ったり、春には土筆を見つけて家に持ち帰り、母に料理してもらいました。自然が周りにたくさんあって、日々季節を肌で感じる事ができました。

私が小さい頃には父はよく上野動物園に連れて行ってくれたので、電車に乗るのは楽しいことでした。「展子、動物園でも行くか」と言う父の声を今でもはっきりと覚えています。大人に押しつぶされても、この時はやはり父の足にしっかりと寄りかかっていた、電車の揺れなどなんのそのという気分でした。帰りの電車はもちろん、疲れきって立っているのもやつとでしたが……。

その後移り住んだ大泉学園もまた、緑が多く、駅から家までの三分ぐらいの道のりは両側に桜の木があり、春には桜のトンネルができました。



イラスト・岡林玲生

文・遠藤展子  
Nobuko ENDO

エッセイスト。1963年東京生まれ。時代小説作家・藤沢周平（本名・小菅留治）の一人娘。著書に『藤沢周平 父の周辺』『父・藤沢周平との暮らし』。現在、山形県鶴岡市に建設される「鶴岡市立 藤沢周平記念館」開設に向けての準備等、父・藤沢周平に関わる仕事に携わっている。